

# 公共事業チェック議員の会 諫干視察

(227号・表側から続く) 8月下旬、雨が降って2日後の干拓地。周囲の畑はプロッコリーの苗付けが終わっていたが、泥化した一角は手つかずのままだった。営農者の40代男性は「地盤が沈下し、水はけは年々悪くなっている。水が完全に引かないとトラクターで耕せない」と顔をしかめた。もともと水はけが良くない「潟泥」の干拓地。営農地は5年契約のリースで、営農者グループ(40法人・個人)は昨年5月、公社に水はけの改善を要請。これを受け調査した公社によると、今年1月のアンケートでは全147区画のうち45区画(201区画)で「排水不良」の回答があり、目視でも16区画(76区画)で問題を確認したという。

もともと水はけが良くない「潟泥」の干拓地は、排水路に向かって勾配をつけて整備し、地下には排水用暗渠が10メートル間隔で設けられている。営農者による暗渠の洗浄や、深く耕して水はけを良くする対応が不十分なケースもあるとみられるが、公社は地盤沈下が均一でない「不等沈下」が広範囲に起きている可能性もあると判断。7月から航空機などによる勾配変化の測量を進めている。ただ、改善策として暗渠補修を全ての排水不良区画で行った場合、試算では約1億7千万円が必要となる。公社は急ぎよ、昨年度からリース料収入の一部を対策基金として積み立て始めたが、本年度

を補えるかは見通せない。公社は「簡易な排水対策も組み合わせる費用を抑えたい。排水の機能低下は一義的には公社の責任だが、費用負担については県や諫早市なども相談したい」と説明。農地を整備した農林水産省は「県からの要望があれば対応を検討する」(農地資源課)としている。

## 公共事業チェック議員の会 諫早干拓事業を視察!

【西日本新聞 2017年8月29日】長崎県／漁業者らと意見交換 公共事業チェック議員の会 諫早干拓農地など視察



よみがえれ!  
有明訴訟弁護団  
(後藤富和)発行  
092-512-1636  
090-9602-0700

超党派の国会議員でつくる「公共事業チェック議員の会」のメンバーが28日、国営諫早干拓事業(諫早市)の干拓農地や潮受け堤防を視察し、漁業者らと意見交換した。

視察したのは民進、共産の衆参議員4人。潮受け堤防では、国に排水門開門を命じた福岡高裁確定判決の原告で漁業者松本正明さん(65)＝島原市＝が「海が締め切られてから漁獲量が激減し、地域経済が成り立たなくなつた」などと説明。公民館であった意見交換会には諫早市や佐賀県太良町の漁業者ら約20人が集まり、国が主張する堤防の防災効果への疑問や、タイラギやノリの不漁を訴えた。

農林水産省は来年度予算の概算要求で、開門調査費の計上を見送る代わりに有明海再生による漁業者支援に取り組み基金100億円を要求する方針。議員の会事務局長の初鹿明博衆院議員(民進)は「国が確定判決をないがしるにするのは三権分立の原則からも認められない。中長期の開門調査が実現するよう」

国会で論陣を張っていききたい」と述べた。29日も雲仙市の排水機場などを見学し、地元漁業者と意見交換する。

## 予測不能のクラゲ漁には頼れない。本来の漁業復活を!

【長崎新聞2017年5月24日】有明海、ビゼンクラゲ不漁 中華高級食材 漁師に痛手

佐賀、福岡両県などにまたがる有明海で九州北部の豪雨後、中華料理の高級食材で知られるビゼンクラゲが不漁となっている。

筑後川から大量の淡水が流れ込んで海水と十分に混ざらず、貧酸素状態になっているのが原因とみられ、クラゲ漁を副収入源とするノリ漁師にとつて痛手となっている。

ビゼンクラゲは、傘の内側が赤茶色なのが特徴で、通常直径60～70センチ、大きいもので1メートルを超える。中国での需要が高まり、有明海でも約5年前からノリ漁が本格的になる前の7～9月ごろに漁が行われてきた。

今年には佐賀、福岡両県の漁協で漁の開始を7月5日と定めたが、当日に豪雨が発生。漁場を調査する佐賀県有明水産振興センター(同県小城市)によると、クラゲの姿はほとんど見えず、休漁する漁師が相次いだ。クラゲ漁を始めて3年目になるという佐賀市のノリ漁師川崎賢朗さん(56)は「今年は昨年の3分の1くらいしか網にかからなかった」と嘆く。中国の富裕層の間で有明海産は質が高いと評判。昨年までは1キロ当たり100～300円ほどで売れ、1隻で1日5000～1万ほど取れることもあった。藤井直紀特任教授は「今年は厳しい状態が続くと思う。来年以降についてはビゼンクラゲの研究が進んでいないこともあって予測できない」と話している。